

作況ニュース（第4号）

水 稲
大 豆

（発行：令和8年6月30日）（編集：令和8年6月26日）

発行：秋田県農林水産部

水 稲

ほ場間差大きい、適期に生育・栄養診断を！

- －生育に応じた中干しの実施を－
- －葉いもち検診の実施を－

1 今後の気象の見通し

（1）東北地方3か月予報（7～9月） 【令和8年6月23日 仙台管区气象台発表】

＜予想される向こう3か月の天候＞

7月：平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

気温は平年並か高い確率40%です。

8月：東北日本海側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

気温は平年並か高い確率40%です。

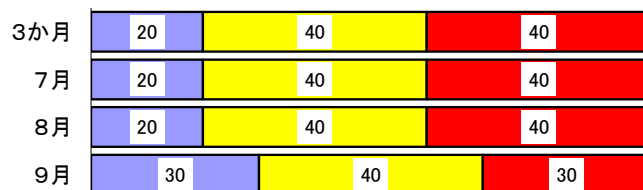
9月：東北日本海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。

気温は、平年並の確率40%です。

＜向こう3か月の気温、降水量の各階級の確率(%)＞

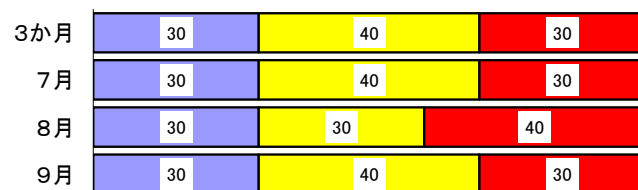
【気温】

[東北地方]



【降水量】

[東北地方]



■低い(少ない) ■平年並 ■高い(多い)

(2) 東北地方 1 か月予報 (6 月 27 日～7 月 26 日) 【令和 8 年 6 月 25 日 仙台管区气象台発表】

<予想される向こう 1 か月の天候>

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。平均気温は、高い確率 50% です。降水量は、少ない確率 40% です。日照時間は、多い確率 40% です。

週別の気温は、1 週目 (6 月 27 日～7 月 3 日) は、平年並か高い確率 40% です。2 週目 (7 月 4 日～7 月 10 日) は、高い確率 50% です。3～4 週目 (7 月 11 日～7 月 24 日) は、高い確率 50% です。

- 次回の予報発表予定： 1 か月予報 毎週木曜日 14 時 30 分
3 か月予報 7 月 21 日 (火) 14 時

【季節予報】

<https://www.jma-net.go.jp/sendai/data/tenkou/forecast/forecast.html>

【2 週間気温予報 毎日随時更新】

<https://www.data.jma.go.jp/cpd/twoweek/?fuk=32>

2 県内の概況

(1) 気象経過

【秋田地方气象台】

6 月中旬： この期間、高気圧に覆われて晴れの日が多かった。気圧の谷の影響により大気の状態が不安定となり、局地的に激しい雨が降った日もあった。
旬平均気温は概ね高い。旬降水量は概ね少ないまたは平年並で、かなり少ない所があった。旬間日照時間は多く、ほとんどの地点でかなり多い。

[旬統計値 (秋田)]

	気温 (℃)	平年差 (℃)	階級 区分	降水量 (mm)	平年比 (%)	階級 区分	日照時間 (h)	平年比 (%)	階級 区分
6 月中旬	21.3	+1.7	高い	24.5	60	平年並	101.4	176	かなり多い

(2) 本田の生育

1) 移植栽培

① 定点調査ほの生育概況

定点調査 (6 月 25 日) が 8 地域振興局によって実施された。

「あきたこまち」(県内 64 地点) は、草丈 35.9cm (平年比 97%)、 m^2 当たり茎数 421 本 (平年比 107%)、葉数 9.1 葉 (平年差 +0.3 葉)、葉緑素計値 43.6 (平年比 99%) であった。平年に比べて全県の草丈は並からやや短く、茎数は並から多く、葉数はやや多く、葉色は平年並だった (表-1)。

「ひとめぼれ」(県内 8 地点) は、草丈 37.4cm (平年比 94%)、 m^2 当たり茎数 487 本 (平年比 95%)、葉数 9.1 葉 (平年差 +0.1 葉)、葉緑素計値 40.0 (平年比 98%) であった。平年に比べて全県の草丈は平年より短く、茎数は少なく、葉数及び葉色は平年並だった (表-1)。

表－１ 定点調査結果（６月25日調査）

品種	地区	草 丈			㎡当たり茎数			葉 数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
あきたこまち	県北	36.4	88	96	447	117	103	9.3	0.3	0.3	43.9	99	99
	中央	39.1	94	101	497	129	126	9.4	0.3	0.5	43.1	98	98
	県南	34.2	84	95	370	100	102	8.9	0.2	0.3	43.7	96	99
	全県	35.9	87	97	421	112	107	9.1	0.3	0.3	43.6	97	99
ひとめぼれ	中央	37.4	84	94	487	99	95	9.1	0.1	0.1	40.0	100	98

②気象感応試験の生育概況（あきたこまち）

６月25日現在の標植の生育は、草丈は45.2cm（平年比114%）、㎡当たり茎数は711本（同136%）、葉数は10.0葉（平年差+0.6葉）、葉緑素計値は45.8（平年比102%）であり、平年より生育が前進し、茎数が多く、草丈は長かった。

また、晩植の草丈は33.4cm（平年比98%）、㎡当たり茎数は515本（同117%）、葉数は9.3葉（平年差+0.4葉）、葉緑素計値は44.3（平年比100%）であり、葉数は標植と同様に平年より多く、生育は前進しており、茎数は多かった。

６月２半旬と５半旬にやや低温だったものの、５月６半旬～６月１半旬、３～４半旬の高温多照により、分けつの発生や葉数増加など生育は旺盛だった。

「あきたこまち」における有効茎決定期の理想生育と比べ、標植では草丈が長く、茎数と葉数はかなり多く、最高分けつ期頃の生育に近かった。晩植では、茎数と葉数で有効決定期頃の上限を上回る生育だった。

表－２ 気象感応試験（６月25日）の生育状況

試験区	移植日	草 丈			㎡当たり茎数			葉 数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
標植	５月15日	45.2	95	114	711	145	136	10.0	+0.5	+0.6	45.8	99	102
晩植	５月25日	33.4	81	98	515	94	117	9.3	+0.2	+0.4	44.3	99	100
有効茎決定期頃の理想生育*		34～38(cm)			388～475(本/㎡)			8.3～8.8(葉)			44～46(SPAD値)		
最高分けつ期頃の理想生育*		46～51(cm)			478～576(本/㎡)			9.5～10.0(葉)			44～46(SPAD値)		

注1) * あきたこまちにおける時期別理想生育量(中央地域)

注2) 平年値は、標植はH12～R7、晩植はH29～R7の平均。

2) 直播栽培

全県の生育概況

6月25日調査の全県の生育は、草丈29.1cm（平年比107%）、㎡当たり茎数609本（同比142%）、葉数7.6葉（同差+0.2葉）、葉緑素計値41.3（同比97%）だった。

平年より茎数がかかなり多く、草丈が長くなった。茎数は、苗立数を確保できなかったほ場においても目標茎数が確保できている状況にあるが、ほとんどの地点で時期別目標生育量の上限値を超過しており、過繁茂が懸念される。また、葉緑素計値は平年よりやや低く、目標生育の下限値を下回る地点が多くなっている。

表－3 調査結果(湛水直播 あきたこまち、農試および農業振興普及課 6月25日調査)

設置 場所	苗立数 (本/㎡)	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年 比%	平年 比%	本年 (本)	前年 比%	平年 比%	本年 (葉)	前年 差	平年 差	本年	前年 比%	平年 比%
農試	138	31.8	101	114	712	264	194	7.7	+0.4	+0.5	41.2	102	103
大館市	172	28.9	104	111	716	385	161	7.1	-0.8	-0.3	39.4	92	91
井川町	91	28.1	100	103	623	222	135	7.4	-0.3	-0.2	39.8	92	94
美郷町	123	28.4	90	97	477	82	95	7.6	-0.5	-0.2	40.5	101	94
横手市	60	28.5	95	110	516	99	127	8.1	+0.2	+1.0	45.6	110	106
全県	117	29.1	98	107	609	210	142	7.6	-0.2	+0.2	41.3	99	97
(参考)	上限	28.0			500			6.8			45		
時期別	目標	26.0	-	-	450	-	-	6.5	-	-	44	-	-
目標生育量	下限	24.0			400			6.1			42		

注) 平年値：過去10年間（H28～R7）の平均値

(3) 病害虫の発生概況

1) 葉いもち

6月3～4半旬の余り苗調査（69地点）において発病は確認されず、発病地点率は0%（平年3.4%）だった。

B L A S T A M法による感染好適判定では、県中央部・県南部を中心に6月21～23日および26～27日に感染好適な気象条件が見られている。

2) 斑点米カメムシ類

6月2～3半旬の巡回調査（40地点）における畦畔での斑点米カメムシ類のすくい取り数（50cm幅、40回振）は2.4頭（平年1.7頭）でやや多く、発生地点率は35.0%（平年33.7%）で平年並だった。そのうち、アカスジカスミカメのすくい取り数は1.4頭（平年1.3頭）で平年並、アカヒゲホソミドリカスミカメのすくい取り数は0.9頭（平年0.4頭）でやや多かった。

注) 病害虫の発生概況の詳細については、令和8年6月22日に発表した令和8年度農作物病害虫防除対策情報 第5号、または令和8年6月30日に発表した令和8年度農作物病害虫発生予察情報 発生予報第3号を参照する（<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/genre/bojo>）。

3 当面の技術対策（7月上旬～中旬）

6月2半旬と5半旬はやや低温だったが、3～4半旬の高温多照と適切な水管理などにより、茎数は全県平均で平年比107%と順調な増加となった。しかし、移植の遅いほ場で茎数の増加が遅れており、ほ場間差は大きい。

茎数を確保したほ場では、直ちに中干しを開始する。茎数が不足しているほ場では、浅水管理を継続するなど、ほ場ごとに生育を確認して状況に応じた時機を逸しない栽培管理を徹底する。

また、イネ科雑草の多い畦畔では斑点米カメムシ類の発生が多いため、畦畔の除草のほか、ほ場内の雑草を防除し、発生を抑制する。

なお、7月は幼穂が伸長する大切な時期である。同時に低温や日照不足、大雨による水害等の気象災害を受けやすい時期でもあるため、気象変化に合わせたきめ細かな管理を徹底する。

（1）中干し・溝切りの実施

本年の生育は移植時期の違いによるほ場間差が大きく、中干しは生育状況に応じて適切に実施する。

1）中干し開始の目安

「あきたこまち」の中苗移植では、第3節から発生する1次分げつを確保できているか確認する。確保できている場合は、第6節の1次分げつが発生したら、それ以降に発生する分げつを中干しによって抑制する。ただし、第3節1次分げつの発生が少ない場合は、第7節1次分げつの発生（9.1～10葉期）後に中干しを行う。

① 目標茎数を確保できたほ場

茎数が過剰とならないよう、通常の中干しを実施し、分げつの発生を抑制する。

② 目標茎数を確保していないほ場

温度の高い日や日照の多い日は浅水管理で水温と地温を高め、分げつの発生を促進する。茎数が十分に確保できない場合は、中干しの開始を遅らせるとともに、強い中干しは行わない。

③ 直播栽培ほ場

本年のように分げつの発生が旺盛な年では6月5半旬までに発生した分げつが穂に有効化しやすいことから、目標茎数が確保できたほ場では、直ちに中干しを行う。過繁茂の場合は、やや強めに行う。

目標茎数を確保していないほ場では、上記②に準じて浅水管理を行い、分げつの発生を促進し、7月1半旬までに茎数を確保し、中干しを行う。

2) 中干しの効果と中干しの程度

中干しは、無効分げつの発生を抑えるとともに、根の活力を高めて1穂粒数と千粒重を増加させる効果が期待できる。また、中干しによって節間伸長が抑制されることにより、倒伏が軽減される。

さらに、中干しに合わせて溝切りを行うと中干し以降の水管理を効果的に行うことができ、高温時の水管理対策にも役立つ。

中干しは7～10日間を目安に行い、田面に亀裂が1～2cm入り足跡が付く程度とし、過度な乾燥は避ける。

3) 中干し終了の目安とその後の管理

幼穂形成期に土壤水分が不足すると1穂粒数の減少を招くため、中干しは幼穂形成期前に終了する。また、中干し終了後は、稲体の活力を低下させないために、間断かん水を行って、土壤へ水分と酸素を交互に供給する。

(2) 生育・栄養診断に基づいた穂肥

生育中期の栽培管理は、理想とする生育量と比較し、生育・栄養診断を実施しながら適切に行う。

「あきたこまち」については、各地域毎に時期別理想生育量を示しているので、生育調査の結果を基にそれぞれの時期・地域における理想生育と比較するとともに、栄養診断を行い穂肥の時期と量を決定する。

(稲作指導指針(以下、「指導指針」という) p. 77～80を参照)

なお、本年の生育は移植時期の違いによるほ場間差が大きいことから、ほ場別に適期に幼穂形成期の栄養診断を実施する。

肥効調節型肥料入りの基肥を施用した場合は、生育量と施肥量、肥効特性および地温等を総合的に考慮し、慎重に追肥診断を行う。

(3) 雑草管理

一発処理除草剤を適期に散布できなかったほ場や水管理が不十分なほ場などでは、雑草が残っている状況がみられる。今後用いる中・後期除草剤は、使用時期に留意して適期に散布する。落水状態で処理する除草剤は中干し期間を利用して散布する。

除草剤の詳細については、防除基準を参照する(移植栽培：p. 326～330, 直播栽培：p. 342～343)

(4) 斑点米カメムシ類の増殖を抑える雑草管理

斑点米カメムシ類は農道や畦畔、休耕田等のイネ科雑草で増殖するので、これらの草刈りはイネが出穂する15～10日前までに地域でまとまって行う。また、アカスジカスミカメはホタルイ等のカヤツリグサ科雑草やノビエの穂に産卵し、増殖するので、水田内の雑草対策を徹底する。

(5) 葉いもちの検診と防除

移植栽培での葉いもちの全般発生開始期は平年で7月5日であるが、全般発生開始期が早まると葉いもちや穂いもちが多くなる傾向がある。ほ場を巡回し、余り苗や本田における葉いもちの発生状況を確認する。特に本年は6月21～23日に複数地点で感染好適な気象条件が見られているため、今後の葉いもちの発生に十分注意する。

余り苗はいもち病が発病しやすく、葉いもちの伝染源となるので、直ちに土中に埋めて処分する。また、余り苗に発病が確認されたほ場周辺では今後の発病状況に注意する。

余り苗や本田に持ち込まれた発病苗からの伝染を確認した場合は、速やかな防除対策を実施する。

これまで葉いもち防除剤を使用していない場合は、直ちにオリゼメート粒剤（2 kg/10a）と、ブラシン剤又はノンブラス剤を併用し、その後必要に応じてビーム剤を追加散布する。

葉いもち防除剤を使用した場合でも、持ち込みによる発病ほ場では防除効果が十分に発揮されないため、病斑を発見した時には直ちにブラシン剤又はノンブラス剤を併用し、その後必要に応じてビーム剤を追加散布する（防除基準p. 28）。

(6) 農薬の飛散防止と安全使用の徹底

- ① 農薬散布前に使用農薬のラベルの適用作物・使用方法等を確認する。
- ② 農薬散布時は、周辺作物などへの飛散防止対策を徹底する。
- ③ 健康管理や服装・装備等を万全にし、散布作業は涼しい時間帯に行う。
- ④ 農薬散布後は、防除器具を確実に洗浄する。
- ⑤ 防除履歴は必ず記録する。

(7) 農作業中の熱中症及びクマ対策の徹底

- ① 高温時の作業は極力避け、日陰や風通しの良い場所で作業する。
- ② 喉の渇きを感じる前に、こまめに水分・塩分を補給する。
- ③ 単独作業は避け、複数人で作業を行うよう心がけて、時間を決めて連絡をとり合う。
- ④ 帽子や吸湿速乾性の衣服の着用や空調服や送風機を活用する。
- ⑤ 熱中症が疑われる場合には、作業を中断し、涼しい環境へ避難し水分を補給するなど応急処置に努める。症状が改善しない場合は早めに医療機関で診察を受ける。
- ⑥ 農作業中を含め、クマ対策を徹底する。
 - ・「クマダス(<https://kumadas.net/>)」で出没をチェックし、クマとの遭遇を避ける。
 - ・作業中はクマ避けの鈴など音のでるものを常に携帯する。

【時期別・主要作業別指導事項】

月 旬	作業の種類	主 な 指 導 事 項
7 月上旬 ～ 7 月中旬	中干し	○目標茎数を確保したほ場は直ちに中干しを行う。 ○茎数が少ないほ場では、中干しの開始を遅らせるとともに、<u>強い中干しは行わない</u>。 ○直播栽培で目標茎数を確保したほ場では、直ちに中干しを行う。過繁茂の場合は、中干しをやや強めに行う。 ○中干しに合わせて溝切りを行い、排水を図るとともに、中干し後の水管理を効果的に行うための準備とする。 ○中干しは7～10日間を目安に行い、田面に亀裂が1～2cm入り足跡が付く程度とし、<u>過度な乾燥は避ける</u>。 ○中干しは幼穂形成期前に終了する。 ○中干し後は間断かん水とする。
	生育・栄養診断の実施	○幼穂形成期の栄養診断に基づき、穂肥の判定を行う。
	雑草管理	○落水状態で処理する除草剤は、中干し期間を利用して散布する。 ○草刈りは、斑点米カメムシ類の増殖を抑えるため、イネが出穂する15～10日前までに地域でまとまって行う。
	葉いもち防除	○余り苗はいもち病の発病の有無にかかわらず、直ちに泥の中に埋めて処分する。 ○ほ場内の検診を実施し、早期発見・早期防除に努める。 ○発病苗等からの伝染を確認したほ場では、速やかな防除対策を実施する。 ○これまで葉いもち防除剤を使用していない場合は、直ちにオリゼメート粒剤と、ブラシン剤又はノンブラス剤を併用し、必要に応じてビーム剤を追加散布する。 ○葉いもち防除剤を使用した場合でも、持ち込みによる発病ほ場では防除効果が十分に発揮されないため、病斑を発見した時には直ちにブラシン剤又はノンブラス剤を併用し、その後必要に応じてビーム剤を追加散布する。
	農薬飛散防止と安全使用	○散布前に使用農薬のラベルの適用作物・使用方法等を確認し、散布時は周辺作物などへの飛散防止対策を徹底する。 ○散布作業は涼しい時間帯に行い、休憩・水分補給を適宜行う。

大豆

中耕・培土で初期生育の安定化

－ほ場内の排水対策を徹底－

－発生草種に応じた除草剤の選択と適期散布－

1 大豆の生育概況

播種作業進捗は、6月20日までに20mm程度のまとまった降雨が複数回あったことから、平年よりもやや遅れて経過している。また、6月上旬、中旬の気温は平年よりも高く、6月中旬の降水量は平年より少なかったことから、出芽状況は良好である。

(1) 農業試験場大豆作況調査

6月3日に播種した「リュウホウ」の出芽までの日数は、9日（平年差±0日）であった。播種後はまとまった降雨があったものの、その後好天が続いたため、出芽までの日数は平年並となった。

注）平年値は平成28年～令和7年のうち最大値と最小値を除いた8か年の平均値。

2 当面の技術対策

今後は梅雨が本格化するため、排水対策を徹底して湿害を回避するとともに、適期の中耕・培土や雑草防除を徹底して、初期生育の確保と生育の安定化に努める。

(1) 排水対策

湿害を回避するため、ほ場周囲に明きょを施工する。明きょの深さは15～25cm程度とし、確実に排水口に接続する。既に施工している明きょでは、耕起や播種作業等により、部分的に崩れていないか確認し、必要に応じて補修を行う。

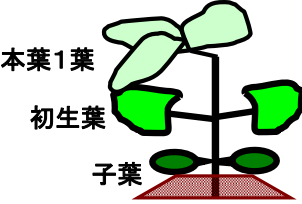
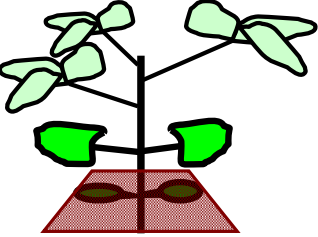
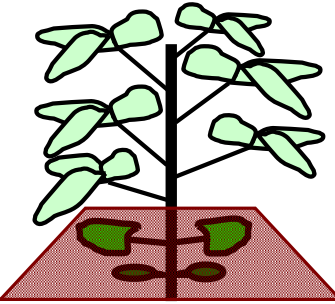
また、排水口が明きょよりも高い場合は、排水口を掘るなどして低くし、枕地の畦が排水を妨げるような場合は、畦切りを行い排水路を確保する。

(2) 中耕・培土

中耕・培土は雑草防除、倒伏防止、湿害回避等の効果があり、大豆の生育向上を図るうえで重要な作業である。ほ場が過湿となりやすい梅雨期であっても、図－1の目安をもとに、天候と土壌の水分状況を見極め、適期に実施する。

- 1) 中耕は、初生葉展開期～本葉1葉期頃、子葉が隠れない程度に株元にしっかり土を飛ばすように行い、株元からの雑草の発生を抑制する（図－1①）。ただし、中耕を行うと播種直後に処理した除草剤の効果がなくなることから、雑草の発生がみられない場合は中耕を省略してもよい。
- 2) 1回目の培土は、本葉2～3葉期頃に初生葉が隠れない程度に行う。2回目の培土は、本葉6～7葉期頃に本葉1葉目の節が隠れない程度に行う。培土は、株元までしっかりと土が盛られるようにする（図－1②、図－1③）。なお、遅い時期の培土は、生育への悪影響の可能性があるので、遅くとも開花の10日前には終了する。

図－１ 中耕・培土（１回目、２回目）位置の目安

	 ①	 ②	 ③
内容	中耕	培土 (1回目)	培土 (2回目)
実施時期	初生葉、本葉１葉が展開した頃	本葉２～３葉が展開した頃	本葉６～７葉が展開した頃
高さの目安	子葉が隠れない程度	初生葉が隠れない程度 (子葉が隠れる程度)	本葉１葉目の節が隠れない程度 (初生葉が隠れる程度)

(３) 雑草防除

当面の雑草防除は中耕・培土により行うが、中耕・培土で雑草を抑えられなかった場合などは、大豆生育期処理除草剤を使用する。薬剤の種類により使用可能な時期等が異なるので使用基準を遵守する。

(防除基準p. 351～358を参照)

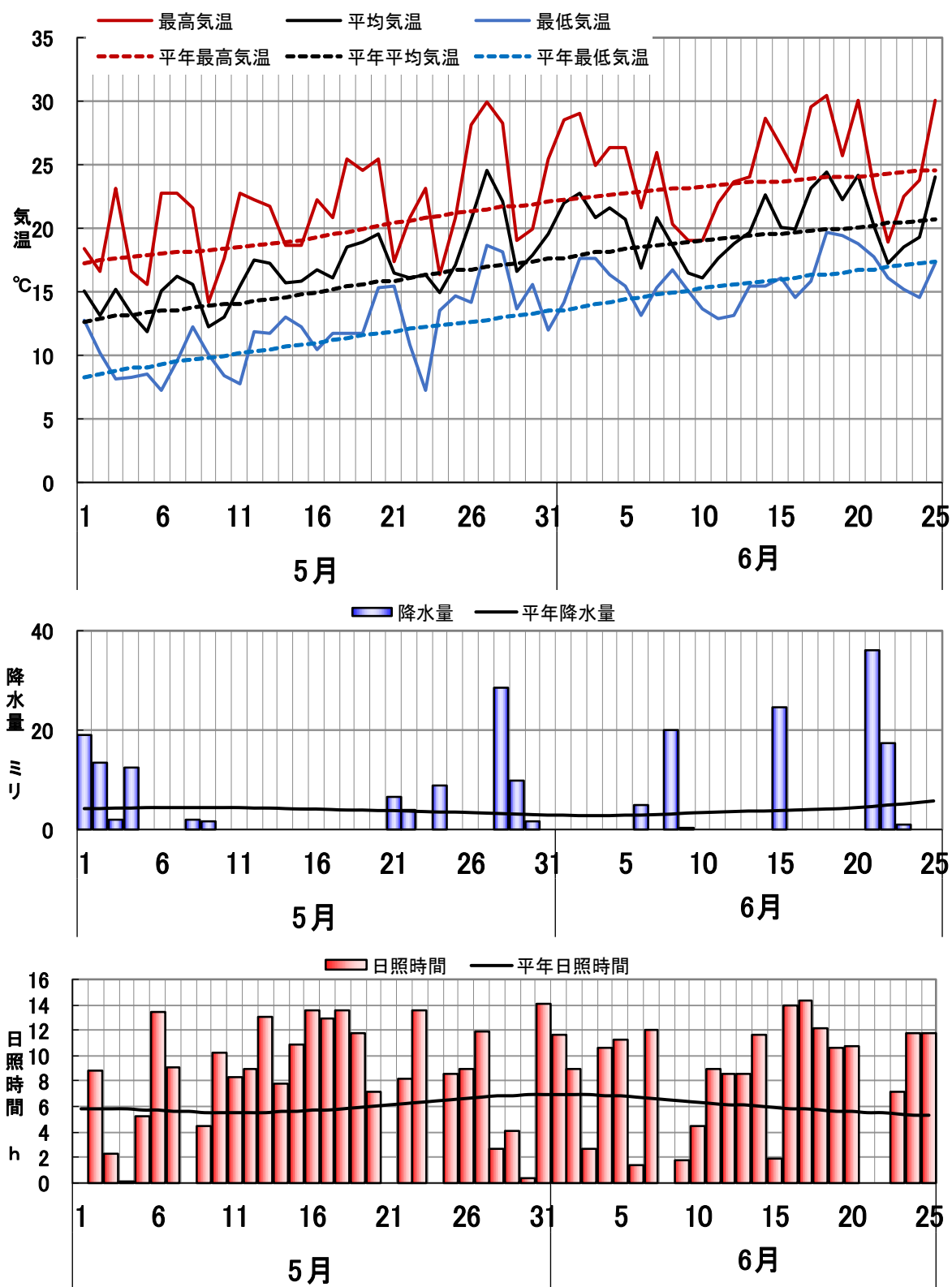
- １) ノビエ、メヒシバ等のイネ科雑草が優占する場合はナブ乳剤、ワンサイドP乳剤、ポルトフロアブルのいずれかを散布する。
- ２) タデ類、アメリカセンダングサ等の広葉雑草が優占する場合は、大豆の２葉期以降（６葉期まで）に、大豆バサグラン液剤を使用する。ただし、大豆バサグラン液剤は、ツククサやエノキグサ等には効果が劣るため、発生草種に注意する。
注) 大豆バサグラン液剤使用の適用品種は「リュウホウ」とする。
- ３) 難防除雑草である、アレチウリ、マルバコウ等のつる性の帰化雑草や、シロザ等の広葉雑草が優占する場合は、大豆の４葉期以降（６葉期まで）に、アタックショット乳剤を使用する（資料編p. 23参照）。ただし、アタックショット乳剤は、タデ類やアメリカセンダングサ等には効果が劣るため、発生草種に注意する。また、アタックショット乳剤は、湿害等により大豆が軟弱気味に生育している場合や処理後３日間の平均気温が17℃を下回ると予想される場合、処理後に連続した降雨が予想される場合は強い薬害を生じるおそれがあるため使用しない。
- ４) イネ科及び広葉雑草の両方が発生している場合は、発生草種に応じて前述したイネ科用選択性除草剤と大豆バサグラン液剤またはアタックショット乳剤との体系処理を行う。

資 料 編

1 気象経過

(1) 令和8年5月1日から6月25日の気象経過図（観測地点：秋田地方气象台）

（気象庁HPより）



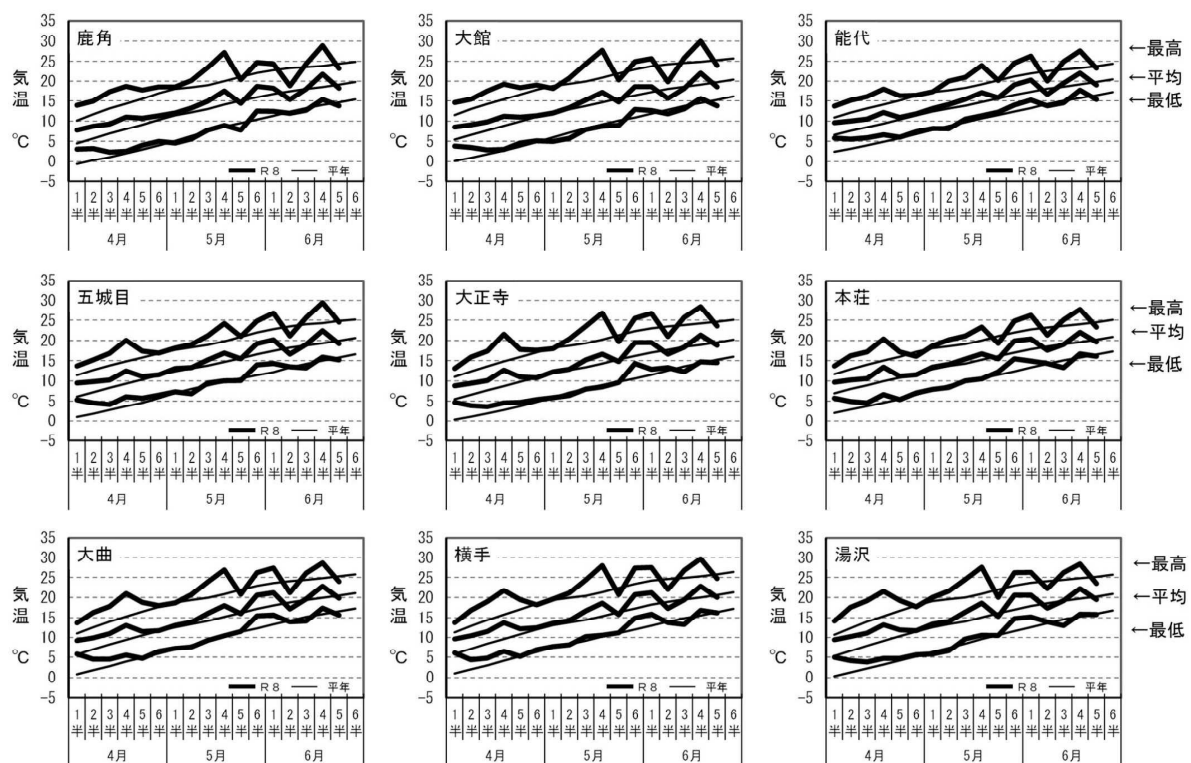
(2) 旬別気象状況 (秋田市)

(秋田地方気象台HPより)

時 期 項 目	5 月上旬		5 月中旬		5 月下旬		5 月 計	
	本 年	平年比較	本 年	平年比較	本 年	平年比較	本 年	平年比較
平均気温(℃)	14.1	+0.5	17.2	+2.4	18.4	+1.5	16.6	+1.4
降 水 量(mm)	50.5	113 %	0.0	0 %	59.5	155 %	110.0	88 %
日照時間(h)	53.6	93 %	107.7	194 %	72.4	101 %	233.7	126 %

時 期 項 目	6 月上旬		6 月中旬	
	本 年	平年比較	本 年	平年比較
平均気温(℃)	19.7	+1.3	21.3	+1.7
降 水 量(mm)	25.5	108 %	24.5	60 %
日照時間(h)	64.6	94 %	101.4	176 %

(3) 各地域の気象経過



図－1 各地域の気温の推移（半旬別、アメダス観測地点別、6月25日現在）

2 定点調査結果（各地域振興局調査 6月25日調査）

表－1 定点調査結果（品種：あきたこまち）

地域 振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
鹿 角	5	34.4	82	95	380	98	80	9.1	0.0	0.2	45.2	97	100
北秋田	9	36.7	86	93	497	114	108	9.4	0.3	0.3	43.6	101	100
山 本	9	37.2	92	99	434	129	110	9.5	0.8	0.6	43.5	99	98
秋 田	10	40.5	95	102	505	134	127	9.6	0.4	0.5	42.9	98	97
由 利	2	32.3	88	97	459	110	127	8.7	0.1	0.4	44.1	98	103
仙 北	10	34.6	84	96	407	109	101	9.0	0.3	0.4	43.4	96	98
平 鹿	11	33.4	85	96	300	89	94	8.6	0.0	0.2	43.5	96	99
雄 勝	8	34.8	83	94	420	103	114	9.0	0.3	0.2	44.3	98	99
全県平均	64	35.9	87	97	421	112	107	9.1	0.3	0.3	43.6	97	99
6月25日の 理想生育量		目標	下限	上限	目標	下限	上限	目標	下限	上限	目標	下限	上限
	県北	34	33	36	428	394	462	8.5	8.3	8.7	42	41	43
	中央	36	34	38	431	388	475	8.6	8.3	8.8	45	44	46
	県南	34	33	36	346	314	378	8.4	8.1	8.6	43	42	44

表－2 定点調査結果（品種：ひとめぼれ）

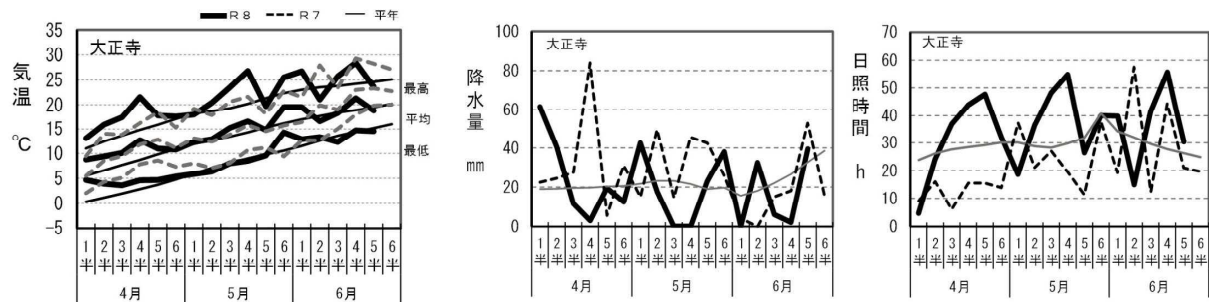
地域 振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
秋田	2	31.8	81	87	517	112	103	8.6	-0.4	-0.3	37.4	93	91
由利	6	39.3	85	96	477	95	93	9.3	0.3	0.2	40.9	103	100
中央地区平均	8	37.4	84	94	487	99	95	9.1	0.1	0.1	40.0	100	98

3 関連解析

(1) 気象感応試験

1) 稲作期間の気象（6月1半旬～5半旬）

6月2半旬と5半旬は、最高気温が平年より低く、やや低温だったが、6月3、4半旬は高温多照で経過し、特に最高気温がかなり高かった。1、3～4半旬の降水量は平年より少なく、日照時間は3～5半旬で多かった。



図－2 令和8年の稲作期間中の気象経過

（6月25日現在、アメダス観測地点”大正寺”半旬別データ）

2) 生育概況

6月18日時点の生育は、標植の茎数が平年比143%でかなり多く、葉数は平年差+0.8葉とかなり多かった。また晩植の茎数は平年比119%と多く、葉数も平年差+0.7葉とかなり多かったが、草丈は平年を下回った。

表－3 気象感応試験(6月18日)の生育状況

試験区	移植日	草 丈					㎡当たり茎数					葉 数					葉緑素計値				
		R8	R7	R7比	平年	平年比	R8	R7	R7比	平年	平年比	R8	R7	R7差	平年	平年差	R8	R7	R7比	平年	平年比
		cm	cm	%	cm	%	本	本	%	本	%	葉	葉	葉	葉	葉			%		%
標植	5月15日	33.6	30.2	111	31.5	106	553	308	180	387	143	9.2	8.3	+0.9	8.4	+0.8	43.1	46.3	93	43.8	98
晩植	5月25日	25.8	28.9	89	27.9	93	319	305	105	267	119	8.2	7.4	+0.8	7.5	+0.7	39.4	43.5	90	39.0	101

注) 平年値は、標植はH12～R7、晩植はH29～R7の平均。

6月25日現在の葉数は、標植で平年差+0.6葉、晩植で平年差+0.4葉であり、6月18日調査時より平年差は小さくなったものの、依然として生育は進んでいる。茎数は標植で平年比136%とかなり多く、晩植においても平年比117%と多かった。標植は最高分けつ期の理想生育に近く、生育が前進している。晩植は、草丈が平年比98%と平年並だが、茎数や葉数から生育が進んでいることが推定される。

表－4 気象感応試験(6月25日)の生育状況

試験区	移植日	草 丈					㎡当たり茎数					葉 数					葉緑素計値				
		R8	R7	R7比	平年	平年比	R8	R7	R7比	平年	平年比	R8	R7	R7差	平年	平年差	R8	R7	R7比	平年	平年比
		cm	cm	%	cm	%	本	本	%	本	%	葉	葉	葉	葉	葉			%		%
標植	5月15日	45.2	47.6	95	39.8	114	711	492	145	524	136	10.0	9.5	+0.5	9.4	+0.6	45.8	46.5	99	45.0	102
晩植	5月25日	33.4	41.4	81	34.0	98	515	545	94	442	117	9.3	9.1	+0.2	8.9	+0.4	44.3	44.9	99	44.3	100

注) 平年値は、標植はH12～R7、晩植はH29～R7の平均。

3) 出葉状況

標植の第7～10葉の出葉は、平年より3～4日早く、第11葉では5日早く出葉した（表－5 標植）。晩植は6月2半旬の低温により、第8葉の出葉がやや鈍化したものの、第9葉以降は平年より3日早かった（表－5 晩植）。

表－5 出葉期の平年比較（気象感応試験 6月25日現在）

試験区	年次	出葉期								
		5葉	6葉	7葉	8葉	9葉	10葉	11葉	12葉	13葉
標植 (5月15日移植 基準)	R8	5/21	5/27	6/2	6/7	6/13	6/18	6/26		
	R7	5/25	6/1	6/7	6/12	6/17	6/23	6/30	7/7	7/15
	平年	5/24	5/29	6/5	6/11	6/16	6/22	7/1	7/11	7/17
	平年差	-3	-2	-3	-4	-3	-4	-5		
晩植 (5月25日移植 基準)	R8	5/29	6/2	6/8	6/14	6/18	6/24			
	R7	6/1	6/7	6/12	6/17	6/21	6/25	7/3	7/11	7/18
	平年	5/31	6/6	6/11	6/16	6/21	6/27	7/4	7/13	7/21
	平年差	-2	-4	-3	-2	-3	-3			

注1) 標植の平年値は、H12～R7までの平均。晩植の平年値は、H29～R7までの平均。

注2) 移植時葉数の平年値は標植は3.4葉、晩植は3.6葉。本年は標植は3.4葉、晩植は3.8葉。

4) 分げつの発生状況（6月25日：表－6、図－3）

標植の調査株では、1次分げつの発生は概ね平年並だが、2次分げつの発生は3節と4節で多く、6月12日以降に増加程度が大きくなった要因と考えられた（表－6 標植、図－3 左）。

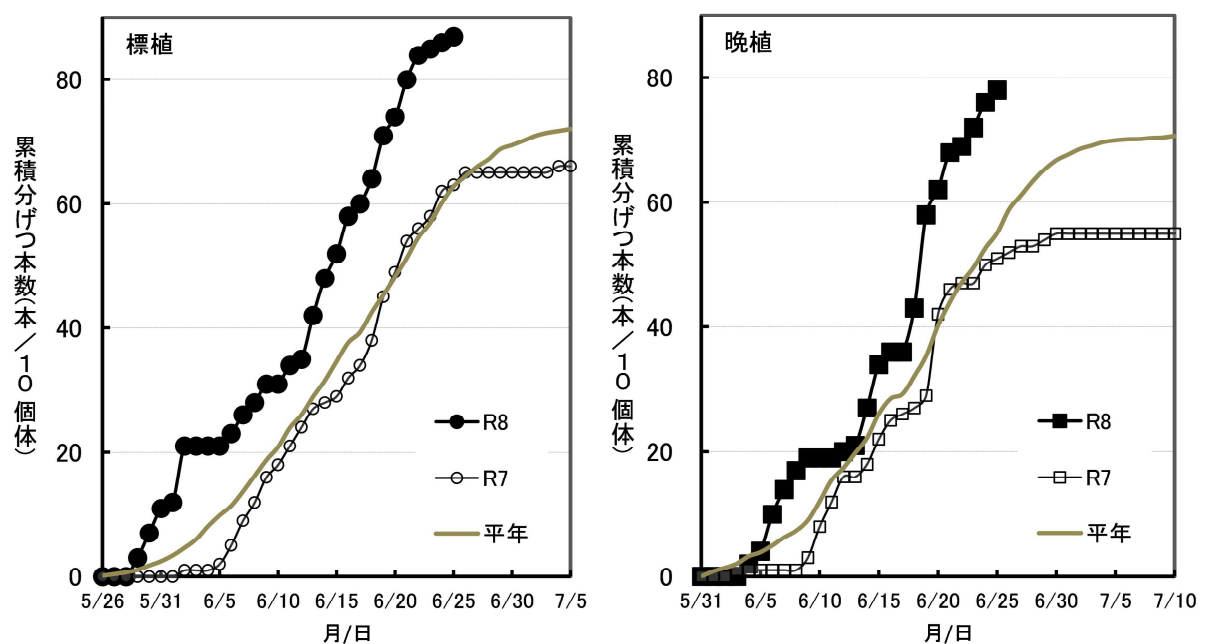
晩植の調査株では、3節1次分げつで平年より多く、2次分げつでは3節と4節で平年より多く発生した（表－6 晩植）。6月17日以降に増加程度が大きくなっている要因も標植と同様に、2次分げつの発生と考えられた（図－3 右）。

表－6 次位節位別分げつ発生状況（本／10個体、6月25日現在）

試験区	1次分げつ								2次分げつ					
	1節	2節	3節	4節	5節	6節	7節	8節	1節	2節	3節	4節	5節	6節
標植	1	3	8	10	10	10	8		1	3	13	17	6	
(平年)	0	3	7	10	10	10	7	1	1	2	9	12	6	1
晩植	0	2	10	10	10	10	4		1	1	16	16	1	
(平年)	0	2	7	10	10	10	6	1	0	2	7	14	5	1

注1) 四捨五入の関係により 各分げつの合計と”分げつ合計”は必ずしも一致しない。

注2) 平年：標植はH13～R7までの最終発生数の平均、晩植はH29～R7までの最終発生数の平均



図－3 分げつ発生推移(6月25日現在)

注) 平年は 標植；H12～R7、晩植；H29～R7 の平均値

5) 土壤残存窒素量 (6月25日現在)

標植の土壤残存窒素量は、移植～6月中旬まで平年を上回って経過したが、6月25日は2.2mg/100g土に急減し、平年(3.0mg/100g土)を下回った(図-4 左)。6月の水稻生育が旺盛になり、作物体への窒素吸収により土壤残存窒素量が低下したと推測される。

晩植は6月上旬まで平年並に経過したが、6月18日で平年を下回り始め、6月25日では3.2mg/100g土で、平年(5.2mg/100g土)を下回った(図-4 右)。

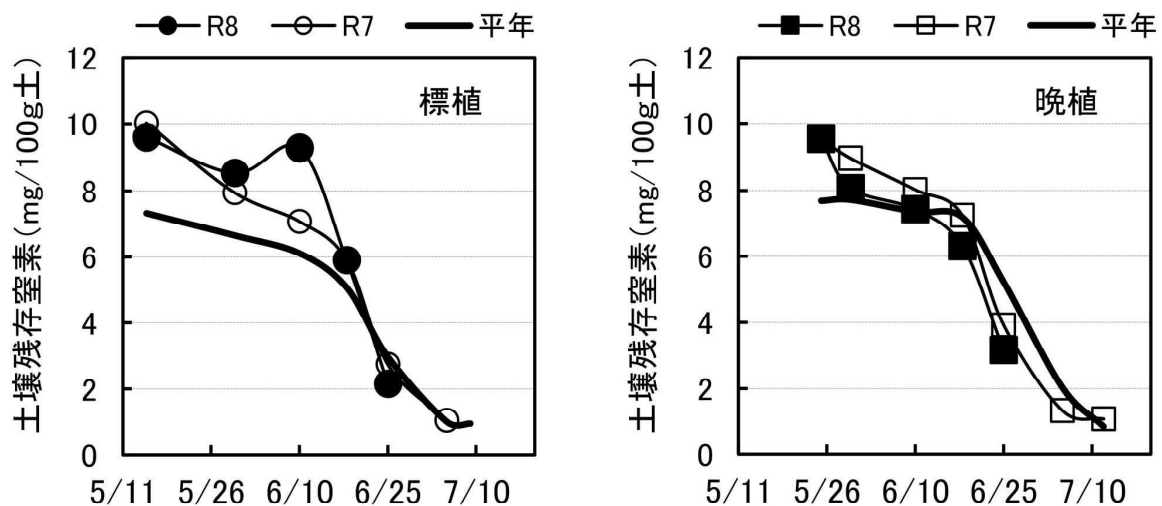


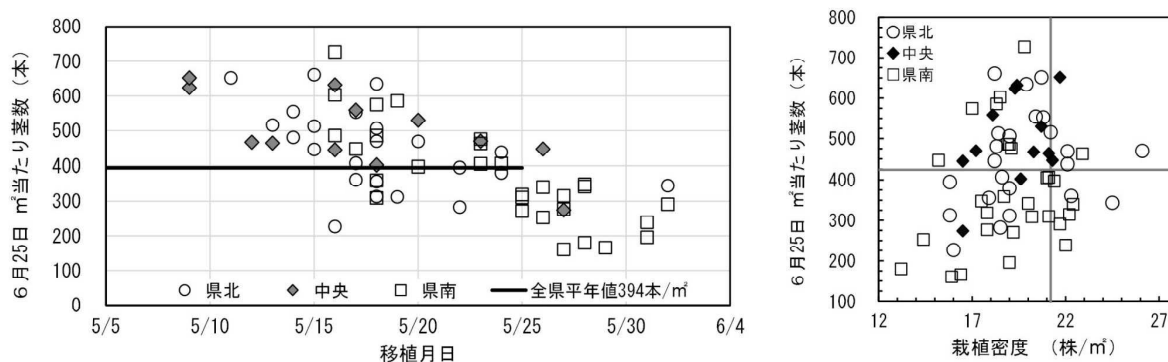
図-4 土壤残存窒素量の消長 (6月25日現在)

(基肥窒素量: N 7kg/10a、平年値: 標植はH12～R7、晩植はH29～R7の平均値)

(2) 定点調査結果からの関連解析

本年は、茎数の増加が概ね順調だが、5月25日以降の移植地点では、茎数の確保が遅れている。また5月15～20日に移植したほ場においても、茎数が不足している地点がある（図－5左図）。また移植日の早晚を考慮しても、栽植密度の小さい地点は茎数の確保が難しく、特に栽植密度17株/㎡（56株/坪）を下回ると、この時期の理想生育の茎数確保は困難である（図－5右図）。これらが要因の一部となり、本年における茎数のほ場間差の拡大につながったと考えられる。

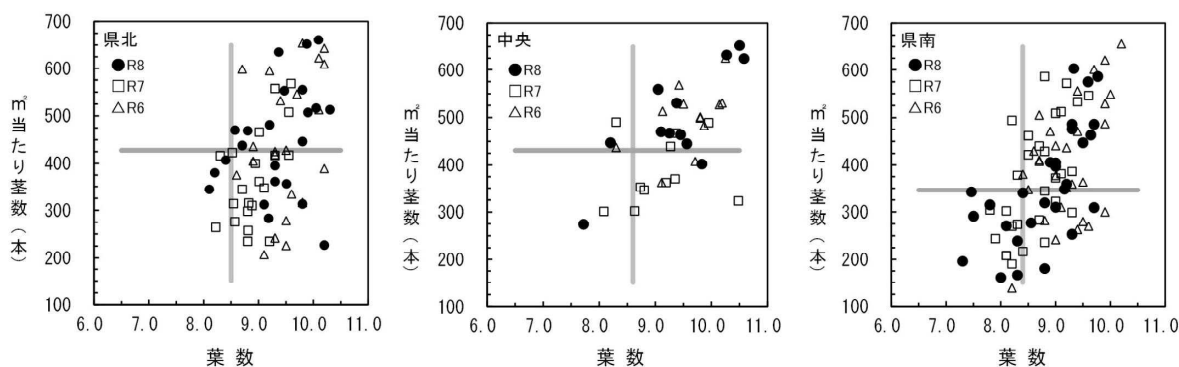
地域別に主茎葉数と茎数の関係をみると、例年並みの分布である。したがって6月25日現在の茎数は、全県平均で平年比107%になっているものの、葉数がやや多い生育であり、茎数が「多い」生育ではなく「平年並」の茎数増加である。また、葉数に対して茎数の少ない地点も例年並にあり、特に県北と県南で理想生育を大きく下回る地点（図中”＋”字の交点より右下にプロット）がある（図－6）。



図－5 移植日と茎数（左図）および栽植密度と茎数（右図）の関係

注1）6月25日定点調査結果（あきたこまち）

注2）右図の縦線は栽植密度21.5株/㎡、横線は6月25日のあきたこまち理想生育量（全県、茎数428本/㎡）を示す）



図－6 主茎葉数と茎数の関係

注）6月25日定点調査結果（あきたこまち）、図中 縦横線の交点”＋”は、理想生育値）

(3) 「あきたこまち」の幼穂形成期予測（表－7）

幼穂形成期（幼穂長 2 mm）の到達時期について、発育モデルを用いて予測した結果を表－7に示した。移植時期から6月28日までは、各アメダス観測地点の日平均気温を用い、6月29日以降は、観測各地点の平年値を用いた。

6月28日時点の幼穂形成期予測（中苗）では、6月29日以降の日平均気温が平年並に推移すると仮定すると、県北地域の田植え盛期（5月20日）では、大館アメダス観測値で7月15日の予測となり、中央地域の田植え盛期（5月19日）では、大正寺アメダス観測値で同じく7月13日の予測、県南地域の田植え盛期（5月23日）では、横手アメダス観測値で7月12日の予測結果となった。なお6月29日以降の気象経過により予測は数日前後することを留意する。

上記予測結果は参考であり水稻の生育状況をよく観察、調査して、気象変化に対応し、時機を逃さない栽培管理に努める。

※最新の生育予測は下記URLをご確認ください。

(<https://rice-forecast.s3.ap-northeast-1.amazonaws.com/index.html>)



こちらのQRからも
「あきたこまち生育予測システム」を御利用頂けます。

このシステムは、「農業DXを牽引する公設試デジタル推進事業」により作成されました。

表－７ 幼穂形成期の予測（あきたこまち）

アメダス 観測地点	移植時期	稚苗			中苗		
	5月	6月29日以降の想定気温経過（平年の日平均気温に対する差）					
		+ 2℃	± 0℃	－ 2℃	+ 2℃	± 0℃	－ 2℃
鹿角	10日	7月11日	7月13日	7月14日	7月8日	7月9日	7月11日
	15日	7月14日	7月16日	7月18日	7月11日	7月12日	7月14日
	20日	7月18日	7月20日	7月22日	7月14日	7月16日	7月18日
	25日	7月21日	7月23日	7月25日	7月16日	7月18日	7月21日
大館	10日	7月11日	7月12日	7月13日	7月7日	7月9日	7月10日
	15日	7月14日	7月15日	7月17日	7月10日	7月11日	7月13日
	20日	7月17日	7月19日	7月21日	7月13日	7月15日	7月17日
	25日	7月20日	7月22日	7月24日	7月15日	7月17日	7月20日
鷹巣	10日	7月10日	7月11日	7月12日	7月6日	7月7日	7月8日
	15日	7月13日	7月14日	7月16日	7月9日	7月10日	7月12日
	20日	7月16日	7月18日	7月20日	7月12日	7月13日	7月16日
	25日	7月19日	7月21日	7月23日	7月14日	7月16日	7月19日
能代	10日	7月9日	7月10日	7月11日	7月5日	7月6日	7月7日
	15日	7月12日	7月13日	7月15日	7月8日	7月9日	7月11日
	20日	7月15日	7月17日	7月19日	7月11日	7月13日	7月15日
	25日	7月18日	7月20日	7月23日	7月13日	7月15日	7月18日
大湯	10日	7月10日	7月11日	7月12日	7月6日	7月7日	7月9日
	15日	7月13日	7月14日	7月16日	7月9日	7月10日	7月12日
	20日	7月16日	7月18日	7月20日	7月12日	7月14日	7月16日
	25日	7月19日	7月21日	7月23日	7月14日	7月16日	7月19日
秋田	10日	7月7日	7月8日	7月9日	7月3日	7月3日	7月4日
	15日	7月10日	7月11日	7月13日	7月5日	7月6日	7月7日
	20日	7月14日	7月15日	7月17日	7月9日	7月10日	7月12日
	25日	7月17日	7月18日	7月20日	7月11日	7月13日	7月15日
大正寺	10日	7月10日	7月11日	7月13日	7月7日	7月8日	7月9日
	15日	7月13日	7月15日	7月16日	7月9日	7月11日	7月13日
	20日	7月16日	7月18日	7月20日	7月12日	7月14日	7月16日
	25日	7月19日	7月21日	7月24日	7月14日	7月17日	7月19日
本荘	10日	7月9日	7月10日	7月11日	7月5日	7月6日	7月7日
	15日	7月12日	7月13日	7月14日	7月7日	7月8日	7月10日
	20日	7月15日	7月16日	7月18日	7月10日	7月12日	7月13日
	25日	7月18日	7月19日	7月22日	7月13日	7月14日	7月17日
大曲	15日	7月10日	7月11日	7月13日	7月6日	7月7日	7月8日
	20日	7月14日	7月15日	7月17日	7月9日	7月10日	7月12日
	25日	7月17日	7月19日	7月21日	7月11日	7月13日	7月15日
	30日	7月21日	7月23日	7月25日	7月15日	7月17日	7月20日
角館	15日	7月11日	7月12日	7月14日	7月7日	7月8日	7月9日
	20日	7月15日	7月16日	7月18日	7月10日	7月11日	7月13日
	25日	7月18日	7月19日	7月22日	7月12日	7月14日	7月16日
	30日	7月22日	7月24日	7月26日	7月16日	7月18日	7月21日
横手	15日	7月10日	7月11日	7月12日	7月5日	7月6日	7月7日
	20日	7月14日	7月15日	7月17日	7月9日	7月10日	7月12日
	25日	7月17日	7月18日	7月20日	7月11日	7月13日	7月15日
	30日	7月21日	7月23日	7月25日	7月15日	7月17日	7月20日
湯沢	15日	7月11日	7月12日	7月14日	7月6日	7月7日	7月9日
	20日	7月15日	7月16日	7月18日	7月10日	7月11日	7月13日
	25日	7月17日	7月19日	7月21日	7月12日	7月14日	7月16日
	30日	7月21日	7月24日	7月26日	7月16日	7月18日	7月21日

(4) 直播作況試験

1) 生育概況

- ① 6月18日の生育は、草丈24.9cm（平年比113%）、 m^2 当たり茎数は463本（同比225%）、葉数は6.1葉（同差+0.4葉）、葉緑素計値は39.8（同比111%）となっている。平年に比べ草丈は長く、茎数はかなり多く、葉数は多く、葉緑素計値は高い。
- ② 6月25日の生育は、草丈31.8cm（平年比114%）、 m^2 当たり茎数712本（同比194%）、葉数7.7葉（同差+0.5葉）、葉緑素計値41.2（同比103%）となっている。平年に比べ草丈は長く、茎数はかなり多い。

表－8 農試直播作況ほ場の生育概況（あきたこまち、湛水土中条播、5月11日播種）

調査日	草丈			m^2 当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
	本年 (cm)	前年 比%	平年 比%	本年 (本)	前年 比%	平年 比%	本年 (葉)	前年 差	平年 差	本年	前年 比%	平年 比%
6月18日	24.9	102	113	463	487	225	6.1	+ 0.8	+ 0.4	39.8	105	111
6月25日	31.8	101	114	712	264	194	7.7	+ 0.4	+ 0.5	41.2	102	103

注1) 平年値：過去10年間（H28～R7）の平均値

注2) 苗立数は6月10日で138本/ m^2

大豆ほ場への 難防除雑草の侵入に注意

近年、これまでとは異なる種類の雑草（帰化アサガオ類など）が大豆ほ場で問題となる事例が増えています。これらの雑草は、ほ場にまん延すると完全に防除することが難しいため、**初期対応が重要**です。ほ場やその周辺で疑わしい雑草をみかけた場合は、指導機関へ相談するなど、初期対応を徹底してください！

つる性の帰化雑草

- 帰化アサガオ類やアレチウリは、種子で繁殖する一年生つる性雑草。
- 発生量が多いと大豆を覆い尽くして収穫不能になるなど、甚大な被害をもたらす。
- 畦畔から侵入することがあるため、畦畔管理も重要となる。

アレチウリ



形態・特徴

- 長さは5～8mに達する。葉はキュウリやカボチャに似る。
- 花は緑白色で、直径1cm程度、5枚の花弁からなる。
- トゲだらけの果実が塊となって結実する。
- 水系を通じて種子が移動する可能性があるため、河川が浸した場合は等も注意が必要。

特定外来生物に指定されており、生きたまま（種も含む）他の場所へ運ぶことが原則禁止されている。

帰化アサガオ類

本県大豆ほ場では、アメリカアサガオ、マルバルコウ、マメアサガオの3種が確認されている。



大豆に絡みついたアメリカアサガオ

アメリカアサガオ

形態・特徴

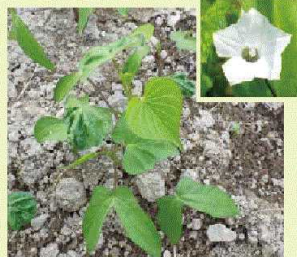
- 長さは数mに達する。花は赤～青色と様々で、直径3cm程度のロータ型、上からみるとほぼ円形である。帰化アサガオ類では県内で最も多くみられる。
- 葉が分裂しないマルバアメリカアサガオは、アメリカアサガオの変種である。



マルバルコウ

形態・特徴

- 長さは3～4mに達する。
- 角があるハート型の葉が特徴。
- 花は朱赤色で、直径1.5～2cm程度の五角形ロータ型である。



マメアサガオ

形態・特徴

- 長さは数mに達する。葉縁は紫色を帯びることが多い。
- 花は白色、まれにピンク色で、直径1.5cm程度である。

イヌホオズキ

- 種子で繁殖する一年生雑草。果実を含めて全草に毒がある有毒植物である。
- 主な被害は、減収や果実などによる汚損粒の発生である。
- 畦畔から侵入することがあるため、畦畔管理も重要となる。



イヌホオズキの幼株（左）と果実（右）



形態・特徴

- 基部からよく分枝し、高さは50～90cmに達する。
- 葉は先のとがった卵形で、縁に不揃いの鋸歯（ぎざぎざ）がある。
- 花は白色で5裂し、直径1cm程度である。
- 果実は球形で直径7～10mm。未熟果は緑色であり、熟すと黒色になる。

作成：秋田県植物防疫協会 編集：秋田県農林水産部（平成30年2月作成）

マルバルコウの写真（全葉）は、秋田県立大学名誉教授 新田弘彦氏 提供

各地域における技術情報等のお知らせ

各地域における技術情報等についての問い合わせは、最寄りの地域振興局農林部農業振興普及課に電話またはFAXでお願いします。

各地域振興局	電話番号	FAX番号
鹿 角 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-23-3683	0186-23-7069
北秋田 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-62-1835	0186-63-0705
山 本 地域振興局農林部農業振興普及課	0185-52-1241	0185-54-8001
秋 田 地域振興局農林部農業振興普及課	018-860-3410	018-860-3363
由 利 地域振興局農林部農業振興普及課	0184-22-8354	0184-22-6974
仙 北 地域振興局農林部農業振興普及課	0187-63-6110	0187-63-6104
平 鹿 地域振興局農林部農業振興普及課	0182-32-1805	0182-33-2352
雄 勝 地域振興局農林部農業振興普及課	0183-73-5114	0183-72-6897

〇SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）LINEで情報発信を行っています

秋田県稲作技術情報

「秋田の米ぢから」



水稻栽培に関する情報をリアルタイムで発信しています。

<主な配信内容>

- ・秋田県内の水稻の生育状況
- ・水稻および大豆の技術情報
- ・異常気象対策
- ・その他、秋田米に関する情報



こちらのQRから
登録できます

記事についてのお問い合わせは

秋田県農業試験場

作物部

生産環境部

秋田県病害虫防除所

秋田地方气象台

東北農政局秋田県拠点

秋田県農林水産部水田総合利用課（農産・複合推進チーム）

園芸振興課（調整・普及チーム）

TEL 018-881-3330

内線(422・423・424)

内線(306・310)

TEL 018-881-3660

TEL 018-864-3955

TEL 018-895-7303

TEL 018-860-1786

TEL 018-860-1801

【次回の発行日は7月9日（木）の予定です】